

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## 5. 広報・社会連携

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-03-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/5053">http://hdl.handle.net/10502/5053</a>

# 5 広報・社会連携

## 概観

2012年度の広報事業の取り組みとして強調すべき点は、効果的な広報活動を行うための既存の広報・広告媒体の見直しやオリジナルグッズの開発、並びに博物館を活用した学校教育・社会教育への貢献及び地域との連携やメディアを利用するなど新たな広報事業を展開したことである。

既存の広報媒体の見直しとして、2011年度にリニューアルしたホームページについて、館員を対象としたアンケート調査の結果に基づき、機能やデザイン等の改善を図るとともに、日本語ページに対応する英語ページを作成し、英語ページの更新を迅速に行うことで外国人向けの情報発信を強化した。また、ホームページ上で公開するメールマガジン（みんぱく e-news）の読者に対してアンケート調査を実施し、今後のインターネットを通じた広報展開のあり方を検討した。さらに、特別展「マダガスカル霧の森の暮らし」においては、新たな広報手段として動画のダウンロードサービスやスマートフォン専用アプリを開発するなど試験的な取り組みを行った。広報誌『月刊みんぱく』については、本館の広報普及誌として全国の研究機関、大学等に寄贈し、研究活動や事業活動を含めた本館の情報を広く提供するとともに、障がい者向け音訳版の収録媒体としてカセットテープ15組及びデジター（DAISY）53枚の2種類を製作した。

現状の広告媒体については、駅電照看板の設置場所の見直しを行うとともに、通年、同一意匠としていた電照看板の意匠を年2回の特別展開催期間中は、特別展デザインに意匠変更することで、より効果的な広報展開を行い集客効果の向上を図った。また、2011年度に作成した本館広報用マルチメディアコンテンツ「新規広報メディア（みんぱく 標本資料コレクター）」については、博物館の利用ガイダンスに参加した小中学校等の教諭へ配布し、利用者アンケートの結果の分析とコンテンツの評価を行ったところである。

新規広報媒体については、みんぱくオリジナルグッズとして、本館ロゴマークの入ったトートバッグ、クリアファイル及びボールペンを製作し、来客またはシンポジウム等のイベント参加者へ広く配布し、利用してもらうことで広報効果を高めた。また、オリジナルグッズに限らず、あらゆる広報物等に付す本館ロゴマークを統一的使用し、かつ、利便性を高めるため、複数の組み合わせパターンのロゴマークを作成し「国立民族学博物館シンボルマーク及びシンボルマークカラー規程」として制定することとした。

学校教育・社会教育活動については、大学教育への貢献として、財団法人千里文化財団の協力のもと、「国立民族学博物館キャンパスメンバーズ」の運用を継続し、高等教育への活用を推進した。2012年度は、継続申し込み2件（大阪大学・京都文教学園）と、新規申し込み2件（同志社大学文化情報学部文化情報学研究科・千里金蘭大学）があり、1,346人の学生や職員が本館を訪れた。また、研究・展示、所蔵資料及び施設などを大学教育に広く活用するためのマニュアル「大学のためのみんぱく活用マニュアル」の配布を継続すると同時に掲載内容の見直しを行い、高等教育への活用を推進した結果、171回96大学、4,475人の大学関係者が展示場を大学授業に利用した。初等・中等教育への貢献としては、近隣の教育委員会と連携した職場体験の受け入れを実施した結果、大阪北摂地域の中学校4校（5名）の参加があり、中学校生徒の校外教育に貢献した。また、小中学校の教諭を対象に、博物館を活用した遠足や校外学習のためのガイダンスを年2回実施した。春に33団体95名、秋に34団体84名の参加があった。さらには、学校教育のみならず、大阪府高齢者大学校において本館の教員30名が1年間を通して授業を行い生涯教育にも取り組んだ。

従来から実施している研究広報事業としては、「みんぱくゼミナール」、「みんぱく映画会」、「研究公演」等を継続するとともに、好評を博している「みんぱくウィークエンド・サロン研究者と話そう」、千里ニュータウンFM放送番組「ごきげん千里837（やあ、みんな）」、毎日新聞連載の「旅・いろいろ地球人」等を通じて社会に向けて定期的に研究情報を発信し続けている。報道関係者との懇談会も月に一度実施し、機関研究をはじめとする最新の研究成果を積極的に紹介している。また、新構築したインフォメーション・ゾーン及びヨーロッパ展示を広く社会へ紹介するための広報活動として、夏に「夏のみんぱくフォーラム2012 知りたい、触れたい、調べたい『みんぱく流』探究のすすめ」、春に「やっぱりヨーロッパ春のみんぱくフォーラム2013」と題して、研究公演、みんぱくゼミナール、映画会、展示場クイズ、ギャラリートーク等の各種イベントを実施した。機関研究関連では、研究過程そのものを社会と共有するという発想に基づいて、平成21年度後期から開始した機関研究「包摂と自律の人間学」のテーマにふさわしい映画を選び、研究者による解説付きの上映会「みんぱくワールドシネマ」を5回開催した。

メディアを通じた広報活動の展開として、万博記念機構とMBSラジオが万博公園で繰り広げる共催イベントに協賛参加し、ラジオ特別番組の公開生放送中に教員が出演し、館内から中継を行った。また、夏季無料観覧、特別展及び研究公演の告知ラジオCMを作成し、MBSラジオのスポット及びレギュラー番組内で放送し、電波による広報に力点を置いた事業を展開した。さらに、ラジオパーソナリティと館長との対談を企画、実施し、幅広い客層に対して、研究の成果や諸民族の文化をわかりやすく紹介した。

地域に根ざした広報活動の一環として、吹田市との連携協力に関する基本協定に基づき、双方の地域連携を推進するために、吹田市内の小中学生を対象とした吹田にぎわい観光協会との連携事業「すいたんへ行こう！みんなく学校で世界のくらし大発見」を本館で開催し、6名の教員が世界各地で受け継がれる知恵、知識、教をみんなくオリジナルの授業として開講した。また、吹田市主催の「ぐるっとすいた」事業に協力し、吹田市の小中学生を対象としたスタンプラリーのポイントとなった。

来館者サービスの面においては、団体利用者に対する本館の概要説明を継続して行うとともに、展示案内学習支援業務スタッフ用にモバイル端末を導入し、展示場内における来館者からの問い合わせに対して、より迅速、丁寧に対応できるよう充実化を図った。また、館内のサインについて、本館全体の看板・印刷物を刷新すべく、ユニバーサルデザインの考えに基づき、基礎プランの作成を進めた。さらに、平成24年度は、家庭での節電対策として、暑い夏をみんなくで過ごしてもらおうと「世界の夏を楽しもう！」と題して7月21日～8月26日の間を無料観覧とし、小中学生及び家族連れを対象にしたイベント「真夏サロン」(全19回)やモノづくりワークショップ(全3回)を実施した。また、5月には「国際博物館の日」の記念事業に参加し、先着100名にきせかえポストカードまたはトーマポール鉛筆を贈呈することで、より多くの来館者に博物館に親しんでもらうための活動を行った。

以上のように、より効果的かつ効率的な広報活動を展開すべく既存事業の見直しと新たな事業を展開し、本館の研究活動及び博物館活動をより広く社会に周知することができた。今後は、研究広報事業を継続しつつ、時代に則した広報媒体を活用することで、外国人も含めた新たな客層へのより広範な情報発信の強化を計画している。

## 国立民族学博物館要覧2012

- ・和文要覧 2012年6月発行
- ・英文要覧 2012年12月発行

## ホームページ <http://www.minpaku.ac.jp/>

本館の研究活動、博物館展示・事業活動、大学院教育の他、刊行物、文献図書資料、標本資料等あらゆる情報を、インターネットを介して世界に発信するためにホームページを作成しており、「みんなく携帯サイト」では、最新のイベント情報や交通案内等を携帯電話からも見ることができる。

提供している主な情報は以下の通り。2012年度の訪問件数は574,640件。

### ・研究活動

研究部スタッフの研究活動や業績、本館が推進する研究プロジェクトや共同研究およびシンポジウム、研究出版物などの情報。

### ・博物館展示・事業活動

常設展示・企画展示・特別展示などの展示紹介、学術講演会・セミナー・研究公演・映画会などのイベント案内、博物館の利用案内、国立民族学博物館友の会などの情報。

### ・大学院教育

総合研究大学院大学の専攻概要、授業と研究指導、在学生の研究内容等および特別共同利用研究員制度などの情報。

### ・データベース

本館が所蔵する文献図書資料、標本資料、マルチメディア情報などのデータベース。

また、「みんなく e-news」を発行し、海外調査からの帰国報告「World Watching」や毎月開催している「みんなくセミナー」、随時行われる「シンポジウム／フォーラム」「研究公演」「みんなく映画会」「特別展」などのお知らせを、月1回電子メールで配信している。2012年度の配信数は51,203部。

## 報道

### ●報道関係者との懇談会

2012年4月25日 10名(10社) 特別展『今和次郎 採集講義——考現学の今』報道・出版関係者向け内覧  
5月17日 11名(9社) 平成24年度4月採用 新任教員からの挨拶、国際シンポジウム『アートと

			博物館は社会の再生に貢献しうるか?」、特別展『今和次郎 採集講義——考現学の今』関連「みんなく映画会」、研究公演『忘れない絆、絶やさない伝統——震災復興と文化継承を願って』ほか
6月21日	8名(7社)	企画展プレ展示『写真で見る東日本大震災と被災文化遺産のレスキュー』、企画展『記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産』、夏みんなくフォーラム2012 知りたい、触れたい、調べたい——「みんなく流」探究のすすめ連続講座「博物館にさわる」ほか	
7月19日	8名(8社)	特別展『世界の織機と織物——織って!みて!織りのカラクリ大発見』、博学連携教員研修ワークショップ2012 in みんなく「学校と博物館でつくる国際理解教育——新しい学びをデザインする」、研究公演『神への祈りと喜びの舞曲——バッハからバルトークへ』ほか	
9月12日	7名(6社)	特別展『世界の織機と織物——織って!みて!織りのカラクリ大発見』報道・出版関係者向け内覧	
10月11日	6名(6社)	国際研究フォーラム『漢族社会におけるヒト、文化、空間の移動——人類学的アプローチ』、国際シンポジウム『ヒーリング・オルタナティヴス——ケアと養生の文化』、公開講演会『だから人類は地球を歩いた——太平洋へアメリカへ』ほか	
11月15日	6名(6社)	カムイノミ、国際シンポジウム『中国の社会と民族——人類学的枠組みと事例研究』、2012年度みんなく若手研究者奨励セミナー、日仏研究交流フォーラム『人口学から世界を理解する』、国際ワークショップ『グローバル支援のための実践人類学——研究と実践のキャリア・プランニング』ほか	
12月13日	7名(7社)	国際研究フォーラム『国際共同取材「中国・ロシア・モンゴル国のトゥヴァ人たち——テュルク系とモンゴル系のあいだ』、やっぱりヨーロッパ春のみんなくフォーラム2013、年末年始展示イベント『へび』ほか	
2013年1月17日	6名(6社)	国際シンポジウム『「樹について考える」シンポジウム』、特別展『マダガスカル 霧の森のくらし』、国際ワークショップ『民族学資料の保存と修復——博物館バックヤードの利用効率向上と自然素材資料の修復』ほか	
2月21日	7名(7社)	日本の文化展示リニューアル、国際シンポジウム『布を使う人、布に包まれる身体』、国際シンポジウム『文化を展示すること——日本とヨーロッパの遠近法を考える』、公開ワークショップ『グローバル支援の人類学——市民社会間で互恵的紐帯をいかに形成するか』(アメリカ)ほか	
3月13日	10名(10社)	特別展『マダガスカル 霧の森のくらし』報道・出版関係者向け内覧	

#### ●新聞等報道件数

2012年度は、テレビ21件、ミニコミ101件、ラジオ12件、雑誌58件、新聞609件、他25件、計826件の報道があった。

#### 月刊みんなく

4月号	(第415号)	(2012年4月1日発行)	特集 「今和次郎の考現学とその遺伝子たち」
5月号	(第416号)	(2012年5月1日発行)	特集 「博物館と博情館」
6月号	(第417号)	(2012年6月1日発行)	特集 「今、ヨーロッパを考える あたらしくなったヨーロッパ展示」
7月号	(第418号)	(2012年7月1日発行)	特集 「世界をさわる手法を求めて ユニバーサル・ミュージアムの可能性」
8月号	(第419号)	(2012年8月1日発行)	特集 「座談会〔特別展〕世界の織機と織物 織って!みて!織りのカラクリ大発見」
9月号	(第420号)	(2012年9月1日発行)	特集 「〔企画展〕記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産」
10月号	(第421号)	(2012年10月1日発行)	特集 「数を操る、数に操られる」
11月号	(第422号)	(2012年11月1日発行)	特集 「どこへ行く日本学?」
12月号	(第423号)	(2012年12月1日発行)	特集 「大阪のなかの異文化」

- 1月号 (第424号) (2013年1月1日発行) 特集 「へび」  
 2月号 (第425号) (2013年2月1日発行) 特集 「はじめに光ありき」  
 3月号 (第426号) (2013年3月1日発行) 特集 「[特別展] マダガスカル 霧の森のくらし」

## みんなくゼミナール

### 第407回 サハリンのキムチ

2012年4月21日

講師 朝倉敏夫

受講者 210名

内容 かつて樺太とよばれたサハリンには数万人の朝鮮半島出身者がいる。彼らはどうしてサハリンに渡ったのであろうか。そして、どのように暮らしているのだろうか。彼らの民族食であるキムチを通して、その歴史と生活について紹介した。

### 第408回 今和次郎 採集講義と日常生活文化研究の現在【特別展「今和次郎 採集講義——考現学の今」関連】

2012年5月19日

講師 荻原正三 (工学院大学名誉教授)

黒石いずみ (青山学院大学教授)

横川公子 (武庫川女子大学教授)

佐藤浩司

受講者 237名

内容 特別展に展示されている今和次郎のスケッチは、大正・昭和期の人々の普段の暮らしを生き生きと伝えている。また、その日常生活の細かな観察を記録し新たな視点で魅力や問題を探る方法には、誰もが目を開かされる。今和次郎が民家研究や考現学で追求した事柄が、現代にどのような意味を持つのかを、青森県立美術館、パナソニック汐留ミュージアムで開催された「今和次郎 採集講義——考現学の今」展を監修した荻原正三、黒石いずみの両先生と、建築人類学や服飾史研究の専門家が解き明かした。

### 第409回 生活財の考現学——高度経済成長期の家庭景観【特別展「今和次郎 採集講義——考現学の今」関連】

2012年6月16日

講師 栗田靖之 (国立民族学博物館名誉教授)

疋田正博 (株式会社シー・ディー・アイ代表取締役)

加藤ゆうこ (株式会社シー・ディー・アイ主任研究員)

受講者 152名

内容 今和次郎の「もちもの一切しらべ」を高度経済成長後の家庭の生活財に適用した栗田靖之名誉教授たちの研究は、家庭景観という視点で生活文化の現在と将来を見通した論考で、日本生活学会第5回「今和次郎賞」を受賞した。共同研究者である疋田正博、加藤ゆうこの両氏とともに、当時の生活文化と現在について考えた。

### 第410回 情報アクティビスト宣言——市民の知的探求と博物館【探究ひろば関連】

2012年7月21日

講師 飯田 卓

受講者 105名

内容 みんなくは、古いものを展示するだけでなく、さまざまな読みものや映像資料をも提供する総合メディアである。その役割を、インターネットが普及した時代状況に照らして整理し、紹介した。とくに近年利用が盛んなインターネット上の双方向メディアを意識しながら、市民レベルの知的探究と博物館の役割を提案した。

### 第411回 ソーシャルメディアに見る人とモノの関係【探究ひろば関連】

2012年8月18日

講師 濱崎雅弘 (産業技術総合研究所)



聞き手 中村嘉志（国立民族学博物館客員教員、国士館大学准教授）

受講者 162名

内 容 今回はこれまでとは少し毛色の異なる話題として人と人の関係を、コンピュータネットワーク上でのデジタル作品作りの視点から考えてみた。デジタル作品と聞くと無味乾燥なイメージを抱くことも多いと思うが、そこにはモノと人、人と人との関係に依拠したモノづくりが存在する意外に泥臭いものである。これらを近年流行のソーシャルメディアと絡めてお話した。

第412回 手仕事への回帰 【特別展「世界の織機と織物——織って！みて！織りのカラクリ大発見」関連】

2012年9月15日

講 師 吉本 忍

受講者 271名

内 容 人類史の中核技術として位置づけられる織りの技術は、産業革命以降に人類が手仕事を放棄し続けてきたことと深くかかわっている。その歴史的経緯と現代社会が直面する危機的状況、そして、全人類の手仕事への回帰の必要性についてお話した。

第413回 バントゥの人びとのラフィア織り

【特別展「世界の織機と織物——織って！みて！織りのカラクリ大発見」関連】

2012年10月20日

講 師 井関和代（大阪芸術大学教授）

受講者 190名

内 容 マダガスカル原産のラフィアヤシの葉繊維から布を織るバントゥ語族の人びとは、中央アフリカのコンゴ盆地からカメルーンのバメンダ高原に分布している。彼らが使っているラフィア機について紹介した。

第414回 東南アジアの織機と衣装 【特別展「世界の織機と織物——織って！みて！織りのカラクリ大発見」関連】

2012年11月17日

講 師 内海涼子（大阪成蹊大学教授）

受講者 221名

内 容 インドネシアやベトナムを中心に、東南アジアとその周辺地域でどのような織機が使用されてきたかを概観し、それらの織機で織られてきた布の素材や装飾技法、さらにどのような形の衣装として着用されてきたかを紹介した。

第415回 樹皮舟を復元する——極東ロシアの白樺樹皮文化

2012年12月15日

講 師 佐々木史郎

受講者 137名

内 容 2005年夏にロシア連邦ハバロフスク地方のアムール川下流域に暮らすナーナイと呼ばれる先住民族の村で白樺樹皮舟の復元製作を行い、それを標本資料として本館に収蔵した。その工程と技術、そしてその背景となる彼らの白樺樹皮文化を紹介した。

第416回 ヨーロッパのキリスト教とファシズム——ルーマニア・レジオナル運動を中心に

【新ヨーロッパ展示関連】

2013年1月19日

講 師 新免光比呂

深澤英隆（一橋大学教授）

江川純一（東京大学大学院研究員）

受講者 246名

内 容 ファシズムといわれる現象の性格は国によって大きく異なるが、いずれも宗教と微妙な関係にある。たとえばイタリア・ファシズムはカトリック、ドイツ・ナチズムはプロテスタントと深く関わっている。講演ではルーマニアのファシズムを中心に、ヨーロッパのファシズムをキリスト教との関係から考えてみた。

第417回 変わるヨーロッパの言語地図——多「言語」社会から「多言語」社会へ【新ヨーロッパ展示関連】

2013年2月16日

講師 庄司博史

受講者 251名

内容 19世紀よりヨーロッパでは多くの国が、教育や行政などを1つのことばで運営する社会を築いてきた。しかし20世紀後半以降、移民の増加や地域的少数言語運動の活発化により、国家語・公用語に加え、さまざまなことばがヨーロッパ社会のなかで顕在化しはじめている。ヨーロッパ発祥の一国一言語主義はどこにむかおうとしているのか考察した。

第418回 家族の今——イタリアの事例から考える【新ヨーロッパ展示関連】

2013年3月16日

講師 宇田川妙子

受講者 224名

内容 家族は現在、世界各地で大きな社会問題の1つになっています。その急激な変化と理想とのギャップ、崩壊なのか再編なのか。家族をめぐる議論はさまざまな立場や観点から数多くおこなわれています。今回は、イタリアの家族のあり方を、その社会背景とともに具体的に紹介しながら、私たち自身の家族についても考え直した。

みんなくウィークエンド・サロン——研究者と話そう

会場 国立民族学博物館本館展示場又は特別展示場

概要 研究部の教員と来館者が展示場内で、より身近に語り合いながら、本館の研究を知ってもらうトークを2012年4月1日～2013年3月31日の約1年間にわたり、47回行った。  
本事業は、研究所としてのみんなく、またみんなくの研究者の多様性を広くアピールすることを目的に、館内で寄せられた複数の応募案より採用された。  
展示資料を解説するギャラリートークだけではなく、簡易スクリーンを設置し、映像資料などを利用した研究発表や、各回平均50～60名の参加者があった。なお、来館者から好評を博し、2012年度も引き続き行われることとなった。

第247回 2012年4月1日 織りと樹皮布づくり

講師 須藤健一

参加人数 55人

内容 オセアニアの伝統的な衣文化は、腰布とタバとよばれる樹皮布。腰布は、バナナやハイビスカスの繊維を紡いで経糸に整経して腰機で織られる。タバは、カジノキの内皮を打ちのぼした紙の布である。いずれも女性の仕事で、衣服だけでなく「貨幣」としても重要である。

第248回 2012年4月8日 民族植物学の旅：暮らしに葉をつかう

講師 ピーター・マシウス（通訳：田淵悦子）

参加人数 54人

内容 私たち人間は食糧の主たる供給源として植物を利用してきた。植物は私たちを養い、私たちが食べる動物をも養う。私たちはまた薬、装飾品、包装資材、容器、織物、編物、縄、住まいなど様々な用途に植物の葉を利用してきた。参加者とともにみんなくの展示場の中を探索した。

第249回 2012年4月15日 新生アラビア語が生んだ“フェイスブック革命”

講師 西尾哲夫

参加人数 35人

内容 中東民主化の流れで中心となった人びとが情報伝達手段として活用したのが、ソーシャルネットワークサービスのフェイスブックであった。IT化によるアラビア語世界でのあらたな言語状況と国民国家について、18世紀以降の近代史のなかで考えた。

第250回 2012年4月22日 邪視とカメレオン——東地中海地域の俗信

講師 菅瀬晶子

参加人数 30人

内容 イスラームなどの一神教を熱心に信仰する中東の人びとは、日本人とはまったく異なる生活をしていると思われがちである。実際、日本人には理解するのが難しい慣習もあるが、その一方で、日本とよく似たところも意外に多い。たとえば他人の嫉妬を買うことをおそれたり、お客をもてなすコーヒーに、「京のぶぶづけ」にも似た意味があるなどの慣習がみられる。日本との相違点に焦点をあて、中東の人びとの生活を、東地中海地域の事例をもとに紹介した。

第251回 2012年4月29日 デジカメとパソコンで考現学【特別展「今和次郎 採集講義——考現学の今」関連】

講師 飯田 卓

参加人数 56人

内容 数値化されないモノや事からの記録と、集まったデータのイラスト的表現を特徴とする今和次郎流の考現学をおこなうために、デジタル技術を駆使することを提案した。たぐいまれな視覚認知能力やデッサン力がなくとも、考現学は科学的な研究方法として身近になってきたといえる。

第252回 2012年5月6日 考現学を楽しむ【特別展「今和次郎 採集講義——考現学の今」関連】

講師 近藤雅樹

参加人数 35人

内容 関東大震災を機に、荒廃した焼け跡の惨状を目の当たりにし、それでも復興に立ち上がるバラック住宅を観察することから今和次郎が発案し、実践した考現学。持ち物一切調べなどのユニークな視点から都市の住民たちの生活を描写するなど、考現学がどのような楽しいガクモンであるのかを披露した。

第253回 2012年5月13日 「済州島の民家」の調査と模型【特別展「今和次郎 採集講義——考現学の今」関連】

講師 朝倉敏夫

岩城晴貞（文化施設・文化事業プランナー）

参加人数 47人

内容 今和次郎の考現学をもとに製作された民家模型が、本館にはいくつか展示されている。「朝鮮半島の文化」展示場にある「済州島の民家」模型も、その1つである。この製作に携わった文化施設・文化事業プランナーの岩城晴貞と韓国研究者の朝倉敏夫が、済州島の民家にまつわる思い出話を語った。

第254回 2012年5月20日 物と家族——ある特別展の舞台裏

【特別展「今和次郎 採集講義——考現学の今」関連】

講師 佐藤浩司

参加人数 45人

内容 ソウルのアパートに住む家族の一切切を持ってきて展示場にならべた「2002年ソウルスタイル」展から10年になる。こんなアリエナイ展示がどうして実現できたのか？ そして、物をなくした家族のその後は？ 物をめぐる人間と家族のドラマについてお話した。

第255回 2012年5月27日 大村しげコレクションを読む【特別展「今和次郎 採集講義——考現学の今」関連】

講師 久保正敏

横川公子（元共同研究代表者・武庫川女子大学教授）

参加人数 72人

内容 料理研究家で物書きの大村しげ氏は、太平洋戦争を挟んで、ほぼ60年間、京都市中京区の五軒町家に暮らしていた。そっくりそのままに残されたモノを1つ1つ記録することによって、暮らし振りの再現を試みた。その結果、20世紀の暮らしを表すタイムカプセルが現れ出てきた。

第256回 2012年6月3日 みんなの考現学遺伝子【特別展「今和次郎 採集講義——考現学の今」関連】

講師 久保正敏

参加人数 54人



内 容 考現学は、生活文化を徹底的に観察し記録する手法が特徴。これは民族学調査手法と同じで、梅棹忠夫も調査に採用し、その後のみんなく研究者も、モノの背景調査、映像記録、データベース分析などの手法と組み合わせて、多くの成果をあげてきたことを紹介した。

第257回 2012年6月10日 民俗建築学者群像——今和次郎先生を中心として【特別展「今和次郎 採集講義——考現学の今」関連】

講 師 杉本尚次（名誉教授）

参加人数 86人

内 容 今和次郎の名著『日本の民家』を中心に、その巾広い学際的な視野は大きな影響を与えた。私が指導をうけるなど多大の影響をうけた今先生の流れをくむ石原憲治、竹内芳太郎、蔵田周忠、小寺廉吉、小川徹をはじめ諸先生の業績や人となりを紹介した。

第258回 2012年6月17日 近代日本の洋装ときもの【特別展「今和次郎 採集講義——考現学の今」関連】

講 師 久保正敏

高橋晴子（元客員教員・大阪樟蔭女子大学教授）

参加人数 70人

内 容 19世紀末以後の世界的な生活文化の西欧化のなかで、わが国の衣文化には、アジアの隣国と共通する傾向とともに、際だった特色があった。それは改良和服へのむなしい努力だった。しかし、きものはそんな努力とはべつの、もっと自由な可能性をもっていたのである。

第259回 2012年6月24日 みんなく流探究のすすめ【探究ひろば関連】

講 師 野林厚志

参加人数 37人

内 容 みんなくの展示の魅力はもちろん、実物のもつ力である。しかしながら、それ以上に展示資料の背景には豊富な関連情報とそれを支える研究はきっと来館者の知的好奇心をおおいにくすぐる。こうしたみんなくの特徴を生かしたみんなく流探究のすすめを通じて、みんなくの展示の楽しみかたを伝えた。

第260回 2012年7月8日 ビルマ／ミャンマーの口コミ力【探究ひろば関連】

講 師 田村克己

参加人数 48人

内 容 ビルマ（現国名ミャンマー）の社会では、人と人とのつながりが大きな意味を持っている。ひとつとは、ラバサイン（茶店）や市場、あるいは家の軒先などで、人と出会い、さまざまな情報を仕入れ、行動する。このようなビルマの「ソーシャル・ネットワーク」についてお話した。

第261回 2012年7月15日 みんなくの展示と映像【探究ひろば関連】

講 師 福岡正太

参加人数 35人

内 容 みんなくは世界各地の様々な映像を蓄積し、ビデオテークやみんなく電子ガイドで公開している。展示にも映像を用いることが多くなってきた。異文化についての発見の場として、映像をさらに生かしていく方法を来館者と一緒に考えてみた。

第262回 2012年7月22日 あたらしくなったビデオテーク——みんなく最後のビデオテーク???

【夏みんなくフォーラム（情報展示関連）】

講 師 山本泰則

参加人数 24人

内 容 みんなく開館のころから展示場で活躍してきたビデオテークが、6年ぶりに新しくなった。システム開発にかかわった1人として、新しい機能や開発の苦労などをお話した。また、初代ビデオテークのビデオを見ながら、ビデオテークの行く末についても考えてみた。

第263回 2012年7月29日 移民の国フランスとアフリカの深い関係

講師 三島禎子

参加人数 54人

内容 フランスは世界で6番目の移民国家である。大統領選挙では移民政策がかならず公約のひとつにあがってくる。1年のフランス滞在の生活体験や、ニュースになった事件をとりあげて、フランスとアフリカの深い関係について話題を提供した。

第264回 2012年8月5日 さわっておどろく「手学問のすゝめ」

——ユニバーサル・ミュージアムの可能性【探究ひろば関連】

講師 廣瀬浩二郎

参加人数 45人

内容 新設された「世界をさわる」コーナーには、各地の人々が創り、使い、伝えてきたモノが展示されている。自分の手を動かして「創る・使う・伝える」を体験する。そして、さわらなければわからないことを指先、手のひら、全身で確かめる。これが手学問の醍醐味である。手学問をキーワードとして、「ユニバーサル＝誰もが楽しめる」博物館の可能性を探った。

第265回 2012年8月12日 沖縄の離島社会における高齢者福祉

講師 加賀谷真梨

参加人数 33人

内容 沖縄の八重山諸島では、おじやおばあが最期まで生まれ育った島で楽しく暮らせるよう、島民が主体的に高齢者のための福祉活動を行っている。顔の見える社会での活動は理想的でたやすいように思われるが、実際には一筋縄ではいかない。そうした離島社会の高齢者福祉の実態と課題を写真資料を用いて提示した。

第266回 2012年8月19日 「身体」について考える——酒蔵でのフィールドワークを通じて

講師 岩谷洋史

参加人数 48人

内容 日本酒は、徒弟的な分業体制のもと、複雑な工程をへて、作られる。そこには、長年の経験に基づく、酒造に携わる人びとの身体に埋め込まれた知識が大きく関わっているといってもいいだろう。兵庫県内の酒蔵を事例としつつ、そうした知識のあり方を映像を見ながら、考えてみた。

第267回 2012年8月26日 東日本大震災被災地のまちづくり

講師 竹沢尚一郎

参加人数 44人

内容 東日本大震災の被災地では、復興まちづくりが最大のテーマである。岩手県大槌町、釜石市で住民主導のまちづくりに協力した経験から、現在どのような形でまちづくりが進行しているのか、住民と行政の相互関係はどのようなか、安全の重視は環境破壊をもたらさないのか、などを考えた。

第268回 2012年9月9日 インドネシアの<sup>いちば</sup>市場と商人

講師 関本照夫

参加人数 29人

内容 ジャワの農村には5日ごとに開かれる定期市がある。そこでは、生鮮食品から、布・衣類、雑貨、農具、薬、ポスター、さらに生きた鶏や山羊などあらゆるものが売られている。買い物の用がある人もない人もたくさん集まり、お祭りのような賑わいとなる。この市場についてお話した。

第269回 2012年9月23日 南アジアの衣装と文様表現

【特別展「世界の織機と織物——織って！みて！織りのカラクリ大発見」関連】

講師 上羽陽子

参加人数 62人

内容 布地に文様を表現するには、織り、染め、刺繍などさまざまな技法がある。南アジアのサリーや被り

布など、多様な衣装にみることのできる文様の表現方法について実物資料に触れながら紹介した。

第270回 2012年10月7日 アイヌの織物

【特別展「世界の織機と織物——織って！みて！織りのカラクリ大発見」関連】

講師 齋藤玲子

参加人数 73人

内容 アイヌの織物にはさまざまな種類があり、衣類用の布を織るための腰機をはじめ、帯・ごご・袋などが、手機や錘機といった異なる技法と道具で作られてきた。実物や映像を見ながら、それぞれの織り方や素材などについて解説した。

第271回 2012年10月14日 ベトナム、黒タイの機織り文化

【特別展「世界の織機と織物——織って！みて！織りのカラクリ大発見」関連】

講師 樫永真佐夫

参加人数 66人

内容 ベトナム西北部からラオス北部の盆地にひろく居住する黒タイは、色鮮やかな織物を織ることで知られている。彼らは村落生活のなかで、染織物の生産をどのように維持しているのだろうか。市場経済化が急速に進む現状をふまえ、お話しした。

第272回 2012年10月21日 見方を発見——染織資料と出会ってみよう

【特別展「世界の織機と織物——織って！みて！織りのカラクリ大発見」関連】

講師 上羽陽子

参加人数 70人

内容 みんなく展示場には、世界のさまざまな地域から集められた染織資料がある。これらをじっくりみる「見方」について話をした。また、作り手や使い手の思いや工夫、資料の背景にあるモノの魅力や物語も考えてみた。

第273回 2012年10月28日 中南米の織機と織物

【特別展「世界の織機と織物——織って！みて！織りのカラクリ大発見」関連】

講師 吉本 忍

参加人数 76人

内容 上衣や頭帯などの衣装とそれらを織っている腰機（こしばた）や、地面に打ち込んだ杭に固定した横木にタテ糸をかけ渡した杭機（くいばた）で織られたコカ袋をはじめとする大小の袋などの中南米の織機や織物をアメリカ展示場で実物を見ていただきながら解説した。

第274回 2012年11月4日 アフリカの織物とプリント布

【特別展「世界の織機と織物——織って！みて！織りのカラクリ大発見」関連】

講師 吉本 忍

参加人数 86人

内容 重石機（おもしばた）や杭機（くいばた）や杵機（わくばた）などの織機で織られた織物とともに、インドネシアのジャワ更紗のロウケツ染め技法やジャワ更紗のデザインを取り込んでつくられたプリント布を、アフリカ展示場で実物を見ていただきながら解説した。

第275回 2012年11月11日 オセアニアの織物

【特別展「世界の織機と織物——織って！みて！織りのカラクリ大発見」関連】

講師 吉本 忍

参加人数 75人

内容 腰機で織られたミクロネシアの織物や、手機によって織られたマオリ族のマントなどとともに、クワ科の樹皮を叩いてつくられる樹皮布（タバ）や、編んでつくられる敷物などを、オセアニア展示場で実物を見ながら解説した。

第276回 2012年11月11日 東南アジアの織機と織物

【特別展「世界の織機と織物——織って！みて！織りのカラクリ大発見」関連】

講 師 吉本 忍

参加人数 52人

内 容 織り手が立ったまま、前進しながら機織りをおこなうという織機や、織りあがりのかたちが輪状となる緋（かすり）をはじめとする織物など、日本には類例のない織物や織機を、東南アジア展示場で実物を見ながら解説した。

第277回 2012年11月25日 ヤギ毛の繊維利用について

【特別展「世界の織機と織物——織って！みて！織りのカラクリ大発見」関連】

講 師 上羽陽子

参加人数 72人

内 容 ヨルダンやシリアなどでは、ヤギ毛を利用したテントや放牧用具をみることができる。西アジアの乾燥地帯での生活や、織りや編みなどの技法でつくられる生活用具について話をした。

第278回 2012年12月2日 黄土文明と現代中国——山西省介休（かいきゅう）市で展開する観光開発

講 師 横山廣子

参加人数 28人

内 容 いま中国は、国を挙げて世界遺産登録を目指すなど、文化政策に力を注いでいる。東西南北の文化が交差する山西省介休市は、歴史的な文化資源を活用する観光開発を進め、2012年9月に研究者を招集して円卓会議を開催した。その取り組みを紹介し、最新の中国の状況を考察した。

第279回 2012年12月9日 グローバル化するインド舞踊

講 師 寺田吉孝

参加人数 22人

内 容 インドの舞踊が世界各地で注目されています。誰がどのような動機で踊っているのか。地域によって踊りのスタイルや演目は異なるのかなど。グローバル化するインド舞踊の現状についてイギリスや北米などを事例として紹介した。

第280回 2012年12月16日 資料の公開・活用のためのひとくふう

講 師 園田直子

参加人数 10人

内 容 資料の公開・活用をささえるのは、保存科学の役目のひとつである。みんなく保存科学研究では、民族資料のもつ特殊性をふまえ、予防保存に力をいれている。また、開館当初からコンピュータを活用するなど、独自のくふうをしている。ここでは、資料の公開・活用のためのひとくふうについて述べた。

第281回 2012年12月23日 年末年始展示イベント「へび」と教職員研修会

講 師 小林繁樹

参加人数 49人

内 容 年末年始展示イベントの今年度のテーマは「へび」であった。みんなくが所蔵している世界各地の「へび」の標本資料と興味深い話題を提供した。この企画は教職員10名ほどが参加した研修会も兼ねていた。その成果の一部である、資料を撮影した写真パネルも紹介した。

第282回 2013年1月6日 移民のささえるヨーロッパ【新ヨーロッパ展示関連】

講 師 庄司博史

参加人数 71人

内 容 いま西ヨーロッパでは移民出身者が人口の1～2割を占める国はめずらしくない。難民や移民労働者としてやってきたかれらが、今日ホスト社会において果たす役割や文化にあたる影響は小さくない。北欧を例にとって紹介した。

第283回 2013年1月13日 ヨーロッパのキリスト教【新ヨーロッパ展示関連】

講師 新免光比呂

参加人数 52人

内容 カトリック、プロテスタント、オーソドックスなどのヨーロッパのキリスト教はどんな宗教なのだろうか。キリスト教徒の毎日の暮らしや聖地への巡礼、オーソドックスで神と出会う場とされるアイコンなどから考えた。

第284回 2013年1月20日 アンデスの神殿とその魅力

講師 松本雄一

参加人数 31人

内容 南米アンデス地域では、今から4000年以上も前から神殿が建造されユニークな文明が開花していた。そして、神殿にはいろいろな仕掛けがあり、人々を呼び、惹きつける工夫がされていた。今回は、神殿における人を魅了するメカニズムを探った。

第285回 2013年1月27日 路上空間は誰のもの？——路上商人による暴動を事例に

講師 小川さやか

参加人数 41人

内容 路上生活者の排除から路上での商業・芸能活動に対する苦情まで、日本でも路上空間の利用をめぐる問題が起きている。タンザニアにおける闇市・路上商売の歴史と路上商人による暴動を事例に「路上空間はいったい誰のものか」について考えた。

第286回 2013年2月3日 ヨーロッパの生業と1年【新ヨーロッパ展示関連】

講師 宇田川妙子

参加人数 38人

内容 ヨーロッパの農業は現在でも人々の生活に強く結びついている。その中心が麦作であるが、そのサイクルは彼らの暦のあり方とも関連している。そうしたヨーロッパの農業と1年のサイクルを、展示品をとおして紹介した。

第287回 2013年2月10日 オセアニアの紛争

講師 丹羽典生

参加人数 38人

内容 オセアニア展示場には、ブーメランから人肉食用フォークそして補人具まで、紛争とそれにまつわる道具が展示されている。本ウィークエンドサロンでは、過去から現在までの紛争について、オセアニアに焦点を当ててお話しした。

第288回 2013年2月17日 ベルリンで既製服が生まれた頃【新ヨーロッパ展示関連】

講師 森 明子

参加人数 48人

内容 「既製服」産業はベルリンで19世紀末に誕生し、このころから、できあがった衣服を店で買うことが普及していく。100年余り前の人々が、産業化の時代をどのように生きていたのか、展示を示しながら説明した。

第289回 2013年2月24日 中央アジアの春の祝祭ナウルズ

講師 藤本透子

参加人数 36人

内容 中央アジアでは、春分の日になウルズと呼ばれる祝祭が華やかに行われる。ナウルズはイラン起源で「新しい日」を意味し、伝統的新年として広く祝われてきた。多民族都市と草原の村におけるナウルズの祝われ方を紹介しながら、ナショナリズムと人々の暮らしのなかの伝統について考えた。



第290回 2013年3月3日 客家建築の世界

講師 河合洋尚

参加人数 52人

内容 客家は、中国最大の民族である漢族の一系統で、独自の言語や文化をもつ集団である。近年、ユネスコの世界文化遺産に認定された土楼をはじめ、客家の建築が世界的な注目を集めるようになってきている。今回は客家建築をめぐる人間関係、風水、陰陽五行、民族的記号などの意味を解説し、奥深い客家建築の世界に迫った。

第291回 2013年3月17日 学校教育の中の八重山芸能

講師 呉屋淳子

参加人数 28人

内容 伝統芸能は、地域社会の中で受け継がれている一方で、近年では、学校の場においても積極的に教授されるようになり、今や伝統的な継承形態の枠組みを越えて伝統芸能を継承するひとつの「場」になっている。八重山の高校生の事例を通して、学校教育において伝統芸能がどのように取り込まれているのかについて考えた。

第292回 2013年3月24日 エチオピア、音楽職能の世界

講師 川瀬 慈

参加人数 33人

内容 エチオピア北部では、それぞれアズマリ、ラリベロッチと呼ばれる音楽集団が古くから活動を行ってきた。それらの集団による地域社会での多様な活動の実態や魅力を、映像や音の資料を通して紹介し、職能としての音楽について考えた。

第293回 2013年3月31日 韓国人主婦がカナダ生活で困るモノ——外からみた韓国物質文化

講師 太田心平

参加人数 30人

内容 韓国の国籍をもつ人びとのうち200人に1人は、カナダに住んでいるとされている。彼／彼女らは、現地での暮らしに適応しながらも、自分たちの生活に韓国製品を必要としている。ある一家の主婦を例に、彼女がどんな韓国製品を必要とし、それはなぜなのかを探った。

## 研究公演

「忘れない絆、絶やさない伝統——震災復興と文化継承を願って」

2012年6月9日、6月10日

解説 林 勲男、陳 天璽

出演 仰山流 笹崎鹿踊保存会、神戸華僑總會 舞獅隊、神戸市立兵庫商業高校 龍獅團

参加者 2494名

内容 東日本大地震は、人々の日常生活はもちろんのこと、文化遺産の存続をも危うくした。本館が支援を行った大船渡市の伝統芸能・鹿踊保存会を招き、活動再開後初の関西公演を行った。「災いを払い、幸せを招く」といわれ、阪神・淡路大震災後に地域の人々を元気づけた中国獅子舞や龍舞、そして新長田の地元の方々との共演も実現した。実演とワークショップを通じて「1.17と3.11」の絆を深めるとともに、震災復興と伝統文化の継承について共に考え、実践した。

「神への祈りと喜びの舞曲——バッハからバルトークへ」【新ヨーロッパ展示関連】

2012年9月2日

解説 新免光比呂

出演 セバスチャン・ジャコミ、加勢百合子、工藤祐意・セシリア

参加者 441名

内容 本公演では、弦楽四重奏・指揮・音楽教育において多彩な才能を発揮しているパリ在住のチェリストを中心にトリオが、バロック音楽の大家バッハにおける民衆的要素としての舞曲という観点からクラ

シック音楽と民衆文化との関連を示した。とくにバッハの無伴奏チェロ組曲からは、バロック音楽に特徴的な組曲を構成するアルマンド、クーラント、ジーク、サラバンドなどの形式が中世の舞踏のリズムに始まることがわかった。さらにバルトークなどの後世の楽曲を演奏することで、クラシック音楽における民衆文化の理解への導きとなった。

「遠い記憶、呼びさます声——ダナンマル家の南インド古典声楽」

2012年10月14日

解説 寺田吉孝

出演 B・バーラスプラマニヤン、T・ギリッシュ、ナーガイ・ムラリダーラン、A.S. ランガナーダン

参加者 368名

内容 インド古典音楽は南北の2系統にわかれており、これまで日本には北インドの器楽演奏が主に紹介されてきた。今回の公演では、南インドの伝説的な演奏家のヴィーナ・ダナンマル（1867-1938）の音楽を、彼女のスタイルを受け継ぐ当代の名手たちの演奏により紹介した。

「鶴鳥神楽《みんぱく公演》」【企画展「記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産」関連】

2012年10月21日

司会 日高真吾

解説 橋本裕之（追手門学院大学）

出演 鶴鳥神楽 神楽衆

参加者 251名

内容 「鶴鳥神楽」は岩手県下閉伊郡普代村に鎮座する鶴鳥神社の獅子頭である「権現様」<sup>ごんげん</sup>を奉じて演じられる、岩手県を代表する民俗芸能である。毎年1月から3月にかけて、1年おきに沿岸部の北と南に点在する「宿」を訪ねて公演する「巡行」<sup>じゆんぎやう</sup>をおこなってきた。鶴鳥神楽の巡行は沿岸部に暮らす人びとの願いに応えるかたちでおこなわれるため、喜びと畏敬の念をもって迎えられて、今日まで連綿と続けられてきました。沿岸部の人びとは1年おきに訪れる鶴鳥神楽の祝福を心待ちにしてきたのである。しかし、東日本大震災が沿岸部にもたらした壊滅的な被害によって、宿の多くが失われてしまった。そこで企画展「記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産」開催を機に、地域とともに再生の道を歩み始めた鶴鳥神楽を大阪に迎えて、民俗芸能の復興を祈った。

「南部藩壽松院年行司支配太神楽《みんぱく公演》」【企画展「記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産」関連】

2012年11月18日

趣旨説明 林 勲男

神楽紹介 橋本裕之（追手門学院大学）

神楽公演 南部藩壽松院年行司支配太神楽

参加者 500名

内容 岩手県釜石市只越町に拠点を置く南部藩壽松院年行司支配太神楽は、元禄12年に釜石の守護神である尾崎大明神の遥拝所が建立されるさい、盛岡藩の修験を地域単位で管理する年行事のうち閉伊郡を担当していた壽松院によって任ぜられて、御神体の御供として奉納されたといわれている。

年行司太神楽は、今日でも釜石三社といわれる釜石総鎮守八雲神社・尾崎神社・綿津見神社の祭典において、いずれも守護役として御神体が渡御するさい最前列に位置して露払いを勤めている。また、尾崎神社の本宮から里宮に御神体を迎える曳船祭においても、御神楽船を仕立てて、御神体が鎮座する御召船を先導し、家々の悪魔祓いを担当する。

さまざまな芸能が伝承されている釜石市内でも、歴史に支えられた由緒と格式を誇る団体として群を抜いているといえる。この年行司太神楽も東日本大震災によって甚大な被害を受けたが、活動を再開し、今回の公演を迎えた。

## みんなく映画会

2012年5月12日

みんなくワールドシネマ 映像に描かれる〈包摂と自律〉

『僕たちは世界を変えることができない。But, we wanna build a school in Cambodia.』

担当講師 佐藤 寛（アジア経済研究所国際交流・研究室長）、秋保さやか（筑波大学大学院生）、鈴木 紀

参加者 358人

内 容 ひょんなことから、カンボジアに学校を建設するためのボランティアに携わるようになった、医大生・葉田甲太のノンフィクションの映画化。漠然とした日常に新たな生きがい求めて、資金集めのチャリティイベントを開催したり、現地視察の旅で過酷な実状に打ちのめされたりする中で、徐々に芽生える責任感や使命感を拠り所に奮闘する今時の大学生を、向井理ら現在の日本映画界を担う若手俳優陣が、伸びやかに好演している。現在もお、HIVに苦しむカンボジアの人々への偏見をなくしたいとの思いで手掛けたドキュメンタリーを各地で上映するなど、ゴールなき支援活動に取り組み続ける葉田氏。そんな彼の実感こもるタイトルから、それでも、行動することが世界を変える小さな一歩につながるというポジティブなメッセージが浮かび上がる、爽快な佳篇だ。

2012年6月3日

特別展「今和次郎 採集講義——考現学の今」関連

記録映画『昭和の家事』

担当講師 小泉和子（昭和の暮らし博物館館長）、佐藤浩司

参加者 379人

内 容 第2次大戦後、日本人の生活様式は大きく変わり、家事も大きく変化した。今では、昔の家事を見知っている人も少なくなってしまった。「昭和の家事」は、明治43年生まれの主婦、小泉スズさんが日常的に行っていた家事を彼女が暮らした家（現・昭和の暮らし博物館／東京都大田区）で3年間にわたり丹念に撮影した記録映画である。昭和時代の庶民の生活の記録としても大変貴重な映像である。スズさんは、炊事、洗濯、裁縫、掃除、育児、看病、近所・親戚つきあいと、一家を支えていく上で必要な家事をすべて自分の手で行ってきた。それは現在の家事とは比較にならないほど量質ともレベルが高く、豊かで奥深い世界が広がっていた。家事から解放された私たちは、楽さ、便利さと引き替えに多くのものを失ってしまった。今こそ、かつてどこの家庭でも当たり前に行われていた家事を見直してみる必要があるのではないだろうか。

2012年7月14日

みんなくワールドシネマ 映像に描かれる〈包摂と自律〉

『路上のソリスト』

担当講師 佐野章二（ビッグイシュー日本代表）、鈴木 紀

参加者 360人

内 容 名門音楽学校でチェロを学びながらも、ある事情から路上での生活を選んだ演奏家と、その奏でる繊細な音色に惹かれるうちに、彼との信頼関係を築いていく記者との交流を綴り、多くの読者の心を掴んだロサンゼルス・タイムズ紙のコラムの映画化。実話をユニークな視点で捉え直した英国の気鋭ジョー・ライト監督の指名を受け、『アイアンマン』『シャーロック・ホームズ』シリーズで、一筋縄ではいかないヒーロー像を打ち出すロバート・ダウニー Jr. が、職業的な正義感や野心に駆られるジャーナリストの、人間としての真の友情に目覚めていく姿に、説得力を与えている。善意からの行為であれ裏目に出る危険を伴う、支援活動のジレンマにも目を向けつつ、相互を尊重し、理解を深め、支え合う姿勢の大切さが、音楽のもつ普遍的な力を通して、ダイレクトに伝わる好篇である。

2012年7月15日

日印国交樹立60周年記念 インド・クラシック映画特集

『放浪者』

担当講師 溝上富夫（大阪外国語大学名誉教授）、杉本良男

参加者 250人

**内 容** 「インド映画の王様」ラージ・カプールがプロデューサー、監督、俳優をつとめた代表作。あらぬ疑いで判事である夫に棄てられた母と、悪に手を染める息子のラージ。青年になった彼に様々な運命が待ちうける。独立を果たしたインドの将来への夢を抱かせる娯楽性と社会性を持った名作。南アジアだけでなくソ連、中国さらにはアフリカ、中東などでも大人気を博し、ムケーシュがうたう挿入歌「流れ者だよ（アワーラ・フーン）」も世界的大ヒットとなった。

2012年 7月16日

日印国交樹立60周年記念 インド・クラシック映画特集

『踊り子』

**担当講師** 田森雅一（国立民族学博物館外来研究員）、杉本良男

**参加者** 370人

**内 容** 19世紀半ばインド北部の古都ラクナウ。幼いころに妓楼に売られ、歌や踊りの芸事に優れた売れっ子の踊り子になったウムラオ・ジャンの波乱に満ちた半生を描く。当時の風俗を再現した豪華なセットや衣裳、あでやかで気品のあるレーカーの見事な踊りなど、インド映画の名作として今も愛されている。レーカーは当時売り出しの新進女優として注目され、このころ発売された日本製サリーの宣伝にも一役買っていた。

2012年 7月22日

日印国交樹立60周年記念 インド・クラシック映画特集

『音楽ホール』

**担当講師** サンディップ・K・タゴール（追手門学院大学名誉教授）、寺田吉孝

**参加者** 290人

**内 容** イギリス植民地下の1920年代ベンガル地方。時代の変化に抵抗し、すべてを失ってまで、最後の栄光と威信をかけて「音楽会」を開催する没落寸前の富裕な地主のすがたを描いたサタジット・レイ監督の代表作。旧地主層から新興商人への富裕層の移り変わりを美しく描いている。また当時のヒンドウスタニー音楽の最高峰の演奏家がじっさいに出演しているので、音楽的にも注目される。

2012年 8月4日

日印国交樹立60周年記念 インド・クラシック映画特集

『シャンカラバラナム』

**担当講師** 寺田吉孝、杉本良男

**参加者** 203人

**内 容** 南インド、アーンドラ・プラデーシュ州の農村。娼婦の娘トゥルシは高名な声楽家シャンカラの歌とともに彼を一途に愛し、身を寄せる。しかし、彼女がもとでシャンカラの名声は墜ちていく。南インド映画音楽界を代表するS. P. バールスプラマニラムらの歌に乗せた古典舞踊クチプディ、それに南インド古典音楽など、音楽と踊りに溢れた70年代テルグ語芸道もの映画の代表作。

2012年 8月5日

日印国交樹立60周年記念 インド・クラシック映画特集

『第一の敬意』

**担当講師** 杉本良男

**参加者** 218人

**内 容** 南インド、タミルナードゥ州の農村。村の実力者として皆に尊敬はされているが、家庭では不幸な身の上のマライチャーミーは、ある日、年も身分も違う娘を愛してしまう。タミル映画界を代表するパラディラージャー監督の代表作であるとともに、名優シヴァージ・ガネーサンの名演が光る80年代タミル映画の名作。当時のタミル農村の生活がリアルに描かれていて、社会文化を知る上でも大いに参考になる。

2012年9月22日

みんなくワールドシネマ 映像に描かれる<包摂と自律>

『君を想って海をゆく』

担当講師 植村清加（東京国際大学専任講師）、鈴木 紀

参加者 347人

内容 不法入国者への支援が違法とされるフランス最北端の港町カレを舞台に、イラクからイギリスに移り住んだ恋人を追い、ドーバー海峡を泳いで渡ろうとするクルド難民の少年と、別居中の妻に未練を残し、市民プールの指導員として孤独な日々を送る元メダリストとのふれ合いを、情感豊かに描く佳篇。難民に食糧を配るボランティアに携わる妻への見栄を発端に、水泳の猛稽古に励む少年の一途な愛に次第に感銘し、親身に世話する中年男に湧き起こる葛藤は、誰もが支援に関わり得る可能性を肯定した上で、それに伴い生じる責任の重みをも、痛切に物語る。入念な取材を重ねたフィリップ・レオレ監督は、命懸けでたどり着いたカレでも警察や偏狭な市民の監視の目にさらされ続ける難民の窮状や、法の壁に屈せず彼らのため個々に活動する人たちの強靱な勇気を、心揺さぶるフィクションとして結実させた。

2012年11月10日

みんなくワールドシネマ 映像に描かれる<包摂と自律>

『未来を生きる君たちへ』

担当講師 佐保吉一（東海大学教授）、鈴木 紀

参加者 255人

内容 デンマーク語の原題“復讐”が示唆するように、9.11以降の血なまぐさい世の風潮に肅然と警鐘を鳴らす、アカデミー賞最優秀外国語映画賞受賞作。デンマークに家族を残し、理不尽な暴力に支配されたアフリカの紛争地の難民キャンプで、支援活動に従事するスウェーデン人医師は、職務と倫理観との間で日々苦悩しながら、いじめに遭う息子を守る父親の責任すら十分に果たせずにいた。その只中に、母親の死を機にロンドンから越してきた転校生が現れ、一見平穏な社会に巣食う暴力性や、すれ違い続きの親子や夫婦の対峙すべき問題が、露になってゆく。極限下に置かれた男女の心の機微を残酷なほどリアルに描いてきた女性実力派監督スサンネ・ピアが、善悪、愛憎など、二元論では単純に割り切れぬ要素を巧みに交錯させつつ、子どもが抱える闇へも分け入り、より重層的な力篇を完成させた。

2012年12月9日

みんなくワールドシネマ 映像に描かれる<包摂と自律>

『少年と自転車』

担当講師 岩崎美枝子（家庭養護促進協会理事）、鈴木 紀

参加者 346人

内容 世界的に評価の高いベルギーの兄弟監督ジャン＝ピエール&リュック・ダルデンヌが、日本で耳にした実話を発想豊かに映像化し、カンヌ国際映画祭で見事グランプリに輝いた。音信不通の父親と再び暮らせる日を一心に夢見て、児童養護施設で悶々と過ごす少年は、大切な思い出の詰まった自転車を買い戻してくれた女性美容師に、週末だけ里親としての支援を頼み込む。唯一の家族に疎外されて傷つき、悪の道に迷い込む少年の固く閉ざされた心を、決然たる美容師が、ゆるやかに解かしてゆく。社会の片隅で喘ぐ若者たちを見つめてきたダルデンヌ兄弟が、血の繋がりを超え、揺るぎない信頼を育み合う2人をまばゆく照らし、映像作家として新たな境地を予感させる珠玉作を撮り上げた。

2013年1月12日

やっぱりヨーロッパ——春のみんなくフォーラム2013関連

『パリ20区、僕たちのクラス』

担当講師 庄司博史

参加者 457人

内容 移民の多い地域に佇むパリ20区の中学校の、あるクラスの1年を、ドキュメンタリー以上にリアルに描出し、カンヌ国際映画祭で、フランス本国に21年ぶりに最高賞をもたらした。正しい文法や言葉づ



かいを熱心に教えるも、日々悩みの尽きぬ国語教師と、多様なバックボーンをもち、ああ言えばこう言う手強い生徒たちとのエキサイティングな対話が、現代のフランスが抱える社会問題をも、鋭く浮き彫りにする。台詞とは思えぬ自然さで、心情を対等につけ合う面々を、カメラは構内から一步も出ずに追い続け、言葉の力や教育の本質もが、生き生きと伝わる好篇に仕上がった。

2013年3月23日

やっぱりヨーロッパ——春のみんなばくフォーラム2013関連

『人生、ここにあり!』

担当講師 松嶋 健（京都大学研究員）、宇田川妙子

参加者 375人

内容 世界初となる精神科病院廃絶法が制定されたばかりの、イタリアでの実話を基に映画化し、本国で驚異のロングランを記録した。83年のミラノを舞台に、精神病院が閉鎖されて居場所を失った元患者たちが、労働運動に励む熱血漢の後押しを得て、眠れる才能を開花させ、廃材を利用した“寄木貼り”事業の成功で、生きる喜びに目覚めていく。その反動がもたらす悲劇にも目を向けつつ、“やればできる”という原題に顕著なように、個性豊かな人物たちを温かく見つめる、作り手のポジティブな姿勢が全篇を貫き、大らかなユーモアに包まれる話題作だ。

## 博学連携

### ●学習キット「みんなばく」

学校機関や各種社会教育施設を対象に、本館の研究成果をわかりやすく伝えることを目的として学習キット「みんなばく」の貸し出しを実施している。みんなばくは世界の国や地域の衣装や楽器、日常生活で使う道具や子どもたちの学用品などをスーツケースにパックしたもので、2013年3月現在で12種類22パックを用意している。

名称	個数	2012年度貸し出し回数
極北を生きる	2	15
アンデスの玉手箱	2	26
ジャワ文化をまとう	1	9
イスラム教とアラブ世界のくらし	1	16
ブータンの学校生活	1	10
ソウルスタイル	4	45
インドのサリーとクルター	2	21
ブリコラージュ	3	2
アラビアンナイトの世界	2	10
アイヌ文化にであう	1	12
アイヌ文化にであう2	1	11
モンゴル	2	36

### ●みんなばく春と秋の遠足・校外学習 事前見学&ガイダンス

春のガイダンス 2012年4月3日、5日、6日

秋のガイダンス 2012年8月28日、8月30日、31日

本館を利用する学校団体の引率教師を対象としたガイダンスを春と秋に実施し、春には33団体95名、秋には34団体84名、計67団体179名の学校関係者が参加した。

当ガイダンスでは、遠足や校外学習など、博物館見学の準備や事前・事後の学習に役立つツールを紹介したほか、これらに関するさまざまな相談も受けた。

### ●職場体験

2012年11月6日～11月15日

中学生に「職場体験学習」の機会を提供しており、2012年度は4校5名の参加があった。

## その他の事業

### ●「ミュージアムぐるっとパス・関西2012」

関西地区の美術館・博物館の宣伝・広報と新規需要の掘り起こし、関西文化の振興等を目的として、実行委員会世話人会の一員として参画した。

### ●展示場クイズ「みんぱQ」

クイズ「みんぱQ」は、展示を観覧しながら知識や興味を広げてもらおうと、クイズ形式で本館展示を楽しんでもらう企画である。本館展示の新構築に合わせ、2012年8月2日～8月25日に「みんぱQ 探究ひろば編」、2013年1月8日～2月3日に「みんぱQ ヨーロッパ編」を実施した。

### ●「音楽の祭日2012 in みんぱく」

実施日：2012年7月1日(日)

フランスで始まった夏至の日を音楽で祝う「音楽の祭典」が、2002年から日本でも「音楽の祭日」として開催されるようになり、当館もその趣旨に賛同し音楽を愛する一般市民に広く当館を解放して開催することとなった。当日は22のグループや個人の演奏があった。

### ●北海道アイヌ協会技術者研修

1990年より本館の所蔵する資料の研究・活用による学術研究の進展とアイヌ民族の文化の振興を目的として、社団法人北海道アイヌ協会が派遣した伝統工芸技術者を外来研究員として受け入れている。2012年度の実績は以下のとおりである。

受入期間：2012年11月14日～12月6日

受入人数：2名

### ●カムイノミ

実施日：2012年11月29日

カムイノミというアイヌ語は「神への祈り」という意味であり、その実施は本館が所蔵するアイヌの標本資料の安全な保管と後世への確実な伝承を目的としている。従来は萱野茂氏（故人、二風谷アイヌ資料館前館長）によって非公開でおこなわれていた。2007年度からは、社団法人北海道ウタリ協会（現 社団法人北海道アイヌ協会）の支部が順にカムイノミと併せてアイヌ古式舞踊の演舞を公開により実施することとなり、2012年度は胆振地区支部連合会の協力を受けた。

## ボランティア活動

「みんぱくミュージアムパートナーズ（MMP）」は、本館の博物館活動の企画や運営をサポートする自律的な組織として2004年9月に発足した団体である。館内で視覚障がい者の展示場案内、休日、祝日等のイベント企画、運営といった多岐に広がる活動を本館との協働で進めている。

「地球おはなし村」は、2003年に本館で開催した特別展「西アフリカおはなし村」を契機とし、2005年10月に発足した団体である。館内でアフリカの音楽活動や昔話の語り活動等をおこなっており、近隣の児童センター、小学校及び児童福祉施設などでも広く活動をおこなっている。

## 財団法人千里文化財団の事業

### ●国立民族学博物館収蔵資料「梅棹忠夫アーカイブズ」の整理及びデータの整備

2012年度実績	デジタル画像化（スキャニング）件数	9,470ファイル
	データの整理と更新件数	9,266ファイル

## ●国立民族学博物館友の会講演会（協力 国立民族学博物館）

## ◎大阪：国立民族学博物館第5セミナー室

第406回 「ベトナム北部山地における盆地民と山地民」

2012年4月7日 講師 櫻永真佐夫 参加者数 39名

第407回 「考現学と民族学」【特別展「今和次郎 採集講義」関連】

2012年5月5日 講師 久保正敏 参加者数 42名

第408回 「タイムカプセルとしての民家模型——なぜ縮尺が1/10なのか」【特別展「今和次郎 採集講義」関連】

2012年6月2日 講師 久保正敏 参加者数 40名

第409回 みんなくコレクションを語る「蚊帳に見えない蚊帳のはなし」

2012年7月7日 講師 白川千尋 参加者数 38名

第410回 「ビルマ／ミャンマーの「絆」の力」

2012年8月4日 講師 田村克己 参加者数 36名

第411回 「聖書を生きる人びと——南部アフリカにおけるキリスト教独立教会の現在」

2012年9月1日 講師 吉田憲司 参加者数 32名

第412回 「世界の織機と異形の織物」【特別展「世界の織機と織物」関連】

2012年10月6日 講師 吉本 忍 参加者数 38名

第413回 ビデオテークより「祭礼の変容を映像で見る——インド・グジャラートの女神祭礼」

2012年11月3日 講師 三尾 稔 参加者数 32名

第414回 みんなくコレクションを語る「ネパールの金のはなし」

2012年12月1日 講師 南 真木人 参加者数 33名

第415回 「時間の変わり目——クリスマスからイースターにかけての祝祭から」

2013年1月5日 講師 宇田川妙子 参加者数 50名

第416回 みんなくコレクションを語る「明治～昭和初期の樺太資料の収集者たち」

2013年2月2日 講師 齋藤玲子 参加者数 39名

第417回 フィールドワークを語る「ヨソモノが感じ、考えたこと」

2013年3月2日 講師 小林繁樹 参加者数 35名

## ◎東京：モンベル渋谷店 5F サロン

第101回 ビデオテークより「ペー族の映像民族誌——制作過程で考えること」

2012年4月15日 講師 横山廣子 参加者数 33名

## ◎東京：江戸東京博物館 学習室

第102回 「貨幣経済を問う視点」

2012年6月9日 講師 小林繁樹 参加者数 19名

## ◎東京：アフリカ料理レストラン「カラバッシュ」

第103回 講演会&amp;食事会「アフリカを食べる」

2012年9月22日 講師 竹沢尚一郎 参加者数 41名

◎東京：JICA 横浜 会議室

第104回 「世界のパスポート／パスポートの世界」

2012年12月9日 講師 陳 天璽 参加者数 73名

◎東京：JICA 市ヶ谷ビル セミナールーム600

第105回 「何処にでもある何処にもない世界 マダガスカル」【特別展「マダガスカル」関連】

2013年3月30日 講師 深澤秀夫（東京外国語大学教授）・飯田 卓 参加者数 60名

●みんぱく見学会（協力 国立民族学博物館）

第47回特別展 「今和次郎 採集講義」

2012年5月5日 講師 久保正敏 参加者数 30名

第48回特別展 「今和次郎 採集講義」

2012年6月2日 講師 久保正敏 参加者数 32名

第49回特別展 「世界の織機と織物」

2012年10月6日 講師 吉本 忍 参加者数 27名

●体験セミナー

第65回 「鯨と人のくらしを考える」

2012年7月14日～15日 講師 岸上伸啓ほか 参加者数 14名

●民族学研修の旅

第80回 アドリア海交易のかがやき——バルカンの歴史・民族を考える

2012年5月17日～26日（10日間・アルバニアほか） 講師 新免光比呂 参加者数 18名

第81回 ミャンマー・タバウン月の祭りを訪ねて——仏教と精霊ナツの儀礼

2013年3月19日～28日（10日間・ミャンマー） 講師 田村克己 参加者数 16名

●ワークショップ

親子でたのしむ「春よこい！——東ヨーロッパのお祭り、踊り、おまもり作りで春をよぼう」

【春のみんぱくフォーラム2013 やっぱりヨーロッパ関連】

主 催：財団法人千里文化財団

助 成：独立行政法人日本万国博覧会記念機構

協 力：国立民族学博物館、一般社団法人関西環境開発センター

会 場：EXPO '70パビリオン、国立民族学博物館 セミナー室

参加者数：

1) みんなで踊ろう！——トランシルヴァニアの踊りと歌（2013年1月27日） 240名

2) ブルガリアのおまもり・マルテニッツァを作ろう！（2013年2月24日） 107名

●みんぱくに集積された資料と情報を活用した出前授業プログラム

主 催：財団法人千里文化財団

協 賛：パナソニック株式会社

内 容：

2012年7月5日 風呂敷を使ってみよう 吹田市山手地区公民館 18名

2012年7月17日 風呂敷を使ってみよう 向日市立第4向陽小学校2年生 101名

2012年11月19日 めでたい紋様大集合——紋切り体験 京都府乙訓教育局 25名

2012年11月25日 雪の家イグラー キッズプラザ大阪 50名

2013年1月31日 風呂敷を使ってみよう 守口市立三郷幼稚園 30名

2013年2月28日 めでたい紋様大集合——紋切り体験 山城地区公民館連絡協議会 20名

2013年3月2日 風呂敷を使ってみよう

長岡京市立長岡第六小学校3年生

45名

## ●石川県立歴史博物館 夏季特別展「マンダラ——チベット・ネパールの仏たち」

会 期：2012年7月14日～9月2日（51日間）

会 場：石川県立歴史博物館 特別展示室

主 催：石川県立歴史博物館、国立民族学博物館、財団法人千里文化財団

後 援：北國新聞社、NHK 金沢放送局、北陸放送、石川テレビ放送、テレビ金沢、北陸朝日放送、金沢ケーブルテレビネット、エフエム石川、ラジオかなざわ、ラジオこまつ、ラジオななお

入場者数：8,063人

## ○関連イベント：講演会「『般若心経』と色即是空」

開 催 日：2012年7月14日

講 師：立川武藏（名誉教授）

会 場：石川県立歴史博物館 学習ホール

主 催：国立民族学博物館友の会、石川県立歴史博物館

参加人数：70名

## ○関連イベント：講演会「日本の曼荼羅文化」

開 催 日：2012年7月28日

講 師：頼富本宏（種智院大学名誉教授）

会 場：石川県立歴史博物館 学習ホール

参加者数：73名

## ○関連イベント：列品解説・フロアトーク

開 催 日：2012年8月4日

講 師：森 雅秀（金沢大学教授）

参加者数：53名

## ○関連イベント：国際シンポジウム「チベット美術の過去・現在・未来」

開 催 日：2012年8月25日

会 場：石川県立歴史博物館 学習ホール

主 催：金沢大学国際文化資源学研究所

協 力：石川県立歴史博物館

参加者数：76名

## ●徳島県立鳥居龍蔵記念博物館 特別陳列「鳥居龍蔵とアイヌ——北方へのまなざし」

会 期：2013年1月26日～3月3日（32日間）

会 場：徳島県立博物館 1階企画展示室

主 催：鳥居龍蔵記念博物館パワーアップ事業実行委員会

特別協力：国立民族学博物館、財団法人千里文化財団、宇都宮大学 廣瀬隆人研究室

入場者数：5,465人

## ○関連イベント：ギャラリートーク①

開 催 日：2013年1月26日

講 師：齋藤玲子

会 場：徳島県立博物館 1階企画展示室

## ○関連イベント：ギャラリートーク②

開 催 日：2013年2月23日

講 師：廣瀬隆人（宇都宮大学教授）

会 場：徳島県立博物館 1階企画展示室

## ○関連イベント：記念講演

開 催 日：2013年2月17日

講 師：佐々木史郎

会 場：徳島県立博物館 イベントホール

参加者数：63名



●スタンプラリー「万博・民博ものがたり」

会 期：2012年9月13日～11月27日（76日間）

会 場：万博記念公園内各施設（国立民族学博物館、EXPO '70パビリオン、大阪日本民芸館ほか）

広報活動：JR大阪駅、御堂筋Kappo2012

主 催：財団法人千里文化財団

助 成：独立行政法人日本万国博覧会記念機構

協 力：国立民族学博物館、一般社団法人関西環境開発センター、大阪日本民芸館

参加人数：約32,000人

●『季刊民族学』（「国立民族学博物館友の会」機関誌）

協 力：国立民族学博物館

編集・発行：財団法人千里文化財団

140号：主な記事「海域アジアの要ジャワのテー・ボトル」（2012年5月25日発行）

141号：特集「文化遺産を再見する」（2012年8月25日発行）

142号：主な記事「三陸沿岸に生きる」（2012年10月25日発行）

143号：主な記事「ふたつのお茶——変貌するミャンマーの喫茶事情」（2013年1月25日発行）

●企画展関連書籍『記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産』

編 集：国立民族学博物館

編集協力・発行：財団法人千里文化財団

●特別展関連書籍『世界の織機と織物』

編集・発行：国立民族学博物館

編集協力：財団法人千里文化財団

●「2013年みんなくオリジナルカレンダー 織〈おり〉」

監 修：国立民族学博物館

発 行：財団法人千里文化財団

